五等分の花嫁と俺

太一

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
今日、風太郎とあいつは結婚する
俺もそろそろこの女との結婚を考えないといけない
何気に人気なんだよな
初めて会った日の事は今でも鮮明に覚えている

目次

出会いの日 ―― 1
第2話 ―― 5
作戦1 ―― 8

出会いの日

「や、やめて下さい」「私達に触んないでよ!!」「良い加減にして」
放課後
校舎の裏庭
その近くで寝ていた為に聞こえた言葉だった
無視する事も可能だが、それはプライドが許さない
仕方なしに裏庭の方に歩いて向かう
5人の女が居て、8人の男が下衆な笑いを浮かべ手を掴んでいる
「おい、お前ら何してんだよ?」
その場にいた全員が一斉にこちらを見た
女の内の1人は目に涙が浮かんでいる
5人共、顔はかなり良い
ナンパでもされていたのだろうか
「なんだテメェ!?」
粋がったヤンキーだな
ピアス、何個開けてるんだお前は
「2年生の西園寺　咲夜だ」
「!お前があの西園寺か。俺の弟分達をずいぶんと痛めつけてくれたようだな?」
あぁ、この前の・・・
確か夜、コンビニに行ったら見つけた奴らか
俺は良くも悪くもこういう現場によくいるんだよな
いつのまにか恨みを買ってたらしい
「女の事を好きなのはわかったが、体より先に心から持っていかないとな」
「うっせぇんだよ!」「馬鹿、殴るな!」
1人が殴りかかってくる
それを横に避けて、背中を蹴る
心底、おかしいものを見るような目でこちらを見る全員

「弱いし・・・」
動きが遅いし、なにより体重を乗せ切れていないパンチ
体幹が無いのも原因だろうか
他の奴がどっから持ってきたのか鉄パイプを持ってきた
鉄パイプを振り上げたのですぐに下から顎を殴る
すると、白い物が口から出た
恐らく歯だな
「歯が1本、欠けたな」「キャ！」
髪がオレンジ色でリボンをつけた女子
その子が、男に取られてる
しまったなぁ
人質にされたか
「おい！動くな！」
そう言われたので、大人しく手を上げた

「なんだ、君自身は、はぁ、強かったんだ、はぁ、はぁ」
息も絶え絶えで話す
余裕がある風にしてるが実はあまり余裕は無い
あの後からずっと殴られてる
特に顔を重点的に
顔からダラダラ血が出てる
「減らず口が・・・！行くぞ！」
そう言って後ろを振り向いた男
次の瞬間、俺が踏み倒した
「何しやがる・・・！」「仕返しだ」
他の女を捕まえた奴には最初に石を投げ、鳩尾に1発
キツイのを入れておく
「やられたままにはしない」
「い、行くぞ・・・！お前、次あったらぶっ殺すからな！」
はぁ、また恨みを買ったか
まぁ良いさ

さっさと家に帰ろう
そう思い、鞄を取り帰ろうとする
「あの！」
「なに？俺は見ての通り早く帰りたいんだけど？」
「そのままだと流石にさ、傷にばい菌が入っちゃうかもしれないじゃん？」
だからなんだというのか
そんな顔をしていたのか女達は
「だから、私達にあなたの治療をさせて下さい！」「嫌です」
咄嗟に口から『嫌です』
なんて敬語が出たよ
だが、これで逆に嫌さ加減が伝わっただろう
「ま、待って！治療させて貰えないとこっちの気が済まないから！」
気の強そうな子がそんな事を言う
このままじゃ帰れないし
腹を括るしかないか
「わかった、じゃあお願いしようかな」

「いっ・・・！」
「あはは、頑張れ凍夜君！お姉さん応援してるぞー」
そう言って消毒液を顔に当ててくる確か一花だっけか
何気に笑顔なのがな
「あれ程、治療を嫌がっていた理由がまさか消毒液とは思いませんでした」
すみませんね、嫌いで
今、喋ったのは多分だが五月
反論したいがヒリヒリ痛くて反論が出来ない
「あ、あの連絡先、交換しませんか？」
「悪いが女子とは交換しない」
何気に敬語の二乃
気が強そうな子だったんだけどな

おかしな子も居るもんだ
「それにしても今日はありがとうございました！」
この元気なリボンは四葉
めっちゃ元気な子
「・・・」
後1人は三玖
ヘッドホンを付けた子
終始無言だな
とにかく、治療は終わり家に帰った

第2話

朝、車で学校へと向かう
すると昨日の5人と校門の前で見かけた
だが、知らないフリをしてさっさと歩いていく
「凍夜、おはよう」

嘘、だろ
誰かと思って振り向けば三玖が話しかけてきた
意外だ
俺と話したくなさそうだったのに
何気に呼び捨てだし
いや、まぁ俺も呼び捨てなんだけども
「お、おう。おはよう。それじゃあな！」
走って靴箱へと向かいロッカーを開ける
すると滝の様な勢いで手紙が出てきた
その場に居た女子からも男子からもの視線が痛い
「うわぁ、物凄い量の手紙」
一葉、それは俺もそう思う
「モテモテですね、西園寺さん！」
モテたくてモテてんじゃねぇよ
そして、この果たし状って文字が見えないのか
「手紙の処理が大変そう」
だろうな
三玖、何気に正論言うなよ
「この量の手紙、鞄に入りますかね？」
お前も思いたくない事を言うな
超嫌だよ、重いんだよこの手紙は
五月もこんな目に合えば面白そうだがな

「何よ、この手紙の量。あり得ないくらいあるじゃない！」
二乃、それ誰かが言ってた気がする
5人、それぞれの感想を聞いた後
手紙の何個かを、選び抜いて捨てる
その手紙にはなんと、果たし状と書いてある嫌がらせだ
はぁ、一日が憂鬱だ

「は？家庭教師をお前が？」
上杉　風太郎
2つに分かれたアホ毛が特徴的
何気に頭が良い
焼き肉定食焼肉抜き
それを頼むこいつはある意味、勇気がある
「そうだ。それで恐らくはあの女の家庭教師だ」
そう言って指さしたのは五月か
頭良さそうだけどな
2人用の席に座り、単語帳を見ながら食事をする
風太郎の真似だ
「ふーん、それで？」
対して興味はないが聞いてみよう
「それでってお前なぁ・・・俺があいつと仲が悪いんだよ」
なる程、なんで俺に言うのか分からん
俺と五月もそんなに仲良くないんだよな
「よかったな」
「良くないから聞いてるんだろうが」
「落とし物ですよー！」
四葉が来た
なにしに来たんだよお前
「あっ、それ俺らのテスト!?」
思わず声を荒げた
なんでこいつが持って・・・まさか落としたのか

だとしたら拾ってくれたのか
「ありがとな。あっ、それは誰のって・・・０点?」
風太郎と俺が自分の答案を取る
すると、何故かもう一枚の答案があるんだが
「私のです!」
冗談だろ
まさか・・・中野家全員がこんなんじゃないよな
だとしたら風太郎は1人で全員の面倒を見なければならないのか
まぁ、違ったら嫌だし面倒くさいから言わないが

結局、気になったので付いてきてしまった
どう見てもあいつらの家だ
信じられん
「風太郎!?」
目を離した隙に走って行った風太郎の後を追いかける
自動ドアが閉まったので中に入れない
「あっ、凍夜。なにしてるの?」
三玖だ
そして、他の3人も居る
と言う事は五月を追いかけて行ったんだな
「何って家庭教「えっ、凍夜君が家庭教師なの!?」
「違う。家庭教師の付き添いだ」
取り敢えず中に入れてもらい部屋の方向へ向かうのだった

作戦1

風太郎の様子を確認してさっさと帰ったが、何気に二乃とかめっちゃ嫌そうだったな
まぁ、どうでも良いんだけども
「で、なんで俺がここに居るんだ？」
何故かまたあの五姉妹の部屋に来ている
なんでだ
意味がわからないぞ
「すまん、お前の力を借りたいんだ」
「全く意味がわからないんだが？」
要約すると俺で二乃を釣る作戦らしい
どんな作戦だ
そして、俺はあまり二乃と仲良くない
お前は俺をなんだと思ってるんだか
「俺は日本史の勉強を俺はするからな」
そう言って勉強道具を広げる
日本史は暗記さえすれば大丈夫だ
「じゃあ、私も」
そう言って三玖が来た
なんだ、こいつ
日本史が好きなのか
二乃は・・・部屋に戻ったようだ
「武将でしりとりしよう、三玖」
唐突にそう言われた事に驚く三玖
風太郎達は聞いていないようだ
「ゲームを交えて勉強する事で効率は上がると思うんだ」
「良いよ。滝川一益」
意外にもあっさり行ったな
まぁ、良いさ

「杉　重吉」
「柴田　勝家」
「遠藤　尚経」
「根来　森重」
「祁答院（けどういん）　良重（よししげ）」

３時間後

あれから暫く粘ってようやく勝った
三玖は・・・なんか頬を膨らませて拗ねてる
なんか、悪いことしたみたいで悪いな
「風太郎、帰るみたいだから俺も帰る。じゃあな」

２日後の朝

勉強と風太郎から逃げ出した五姉妹
何故か俺の近くにいる
俺の近くに居ると奴がすぐ気づくと思うんだが
「ごめんね、凍夜君」
一緒の車の中でそんな事を言う一花
後部座席に一緒に乗っており、何気に面目なさそうだ
「いや、良いけどさ何気に目が合ってる気がするんだが？」
何気に風太郎と目が合ってるんだよ
なんでかな
本気で合ってるんじゃないか
「嘘でしょ!?車の中に居るのよ!?」
車の中で目が合わないなんて理屈はないぞ
「上杉さん、実は車に乗ってるの見かけてたとか？」
四葉がそれっぽい事を言い出した
それが本当だとしたら、まぁ必然的に目が合うよな
「運転手、出してくれ。俺の家で良い」
車を取り敢えず出させた
冷蔵庫の中から適当な飲み物を取り出し、渡していく
何気に甘いの嫌いって言ってるのに乗ってるのすごいよな、この車

１０こくらいのパフェ
それも全部味が違うし
「食べたいパフェがあったら勝手に食べてくれ。俺は寝る」
そう言ってアイマスクを付けて寝たフリをする
さて、風太郎を俺の家に呼んで勉強会でいいか
パフェとかなら作るの得意だし
材料なら恐らくあるだろう
さっき、パフェの全部の味を覚えた
あれで誰がどれを食べたのかは知らんが、恐らくは好きな物を食べるだろう
作戦１は食べもので釣る
先に自習をさせておいて、その後に糖分摂取の話を持ちかけよう
五月は確か結構食べてたし
待て、一葉達ってどのくらいまで食べるんだ
作戦開始にすぐつまづいたのだった